

国際交流基金・アジア理解講座「中国の外交」  
第一回 中国外交への歴史的なアプローチ(9月26日)

担当:川島 真

[shin@juris.hokudai.ac.jp](mailto:shin@juris.hokudai.ac.jp) (ご質問はこちらにどうぞ)

### 《本日の講義の概要》

中国の外交にはさまざまな説明の仕方があります。現在のところ、経済発展・生活向上と共産党自身の統治能力の維持という国内政治の根幹が外交も規定している側面が強いように思います。そしてそれは外交となって立ち現れると、一見、多元的な姿を見せます。すなわち、一面では「和平台頭」や「周辺との協調外交」といった、中国外交の「合理化＝国際標準化」といわれる面が現れます。しかし他面で、国力のある国が合理性や協調性をもてば、国際的プレゼンスの向上を伴うため、大国としての外交という性格が現れます。さらには、社会生活の向上のためには欠かせない資源をめぐる外交や、国際社会で否定的に捉えられがちな国々との親密な外交には、「独自路線」があるようにさえ思えます。この講義では(1)全体のガイダンスとして、こうした中国外交の全体像とともに、(2)現在の中国外交の正当性を支える一要因である中国外交の歴史についてもお話をしていきたいと思えます。

### 《「中国の外交」という講座の構成意図》

「中国の外交」は、日本のみならず、いまや世界的な関心事です。しかし、日本では日中関係と日米関係などに報道が限定されていることもあり、中国の目線から見た外交、中国外交の全体像は見えにくくなっています。たとえば、中国から周囲を見渡せば、北朝鮮国境、モンゴルからロシア、中央アジア、インド、東南アジア、台湾といった具合に、非常に多様な周辺地域をもっていることがわかります。日本を含む北東アジアの関係は、そのうちの五分の一、六分の一に過ぎません。日本では、日本から見た中国の外交の姿を中国外交の全体像へと拡大していないでしょうか。

また、日本から見える中国の軍事、経済、文化などの各分野の外交は、中国の対外戦略の中でどのような意味をもっているのでしょうか。そのためには、軍事、経済、文化などの各分野における対外戦略の全体像を把握しなくてはならないと思えます。

いま、中国に関する情報は巷にあふれています。特に外交については、中国が「責任ある大国」となるか、「覇権国家」となるか、という大きな問題を含めて、一大関心事になっています。しかし、その外交を理解するには、まず中国の目線で外交を理解する必要があると思えます。そこで、この講座では、中国の外交について、国境線をめぐる外交、アメリカ、上海協力機構、ASEAN、北朝鮮、日本との外交、そして軍事、経済、文化などの各分野について理解を深めていただき、その姿を把握していただければと思えます。

### 《講義の全体像》

第2回 10月3日(火)中国のパブリック・ディプロマシー……………青山 瑠妙

第3回	10月10日(火)	中国の文化外交	王 雪萍
第4回	10月17日(火)	中国の経済外交—WTO、FTAをめぐる—	田島 俊雄
第5回	10月31日(火)	中国外交の軍事外交	松田 康博
第6回	11月14日(火)	中米関係	高原 明生
第7回	11月21日(火)	中国と上海協力機構	石井 明
第8回	11月28日(火)	中国の対朝鮮半島外交	平岩 俊司
第9回	12月5日(火)	中国とASEAN:東アジアの地域協力の視点から	清水 一史
第10回	12月12日(火)	中国の国境線とそれをめぐる外交	岩下 明裕
第11回	12月19日(火)	日中関係をどう再構築するか	毛里 和子

## 《中国外交の位置づけ方》

### ■中国という国

欧米からもリスペクトされる長い歴史と「文明」を有している国

面積、人口ともに「大国」

陸の大国と海の大国／多面的な国境地帯

社会主義国、社会主義的な「民主」はあるが、いわゆる民主化はしていない

経済発展を続ける世界の経済(製造業)のエンジン

しかし、「発展途上国」

国民国家建設中の国

### ■ある種の見方

中華思想をもち、自己中心的な外交をおこなう中国

拡大し周辺国にとって脅威となる中国、軍事大国として侵略の可能性のある中国

強いナショナリズムを背景にした国威発揚型の外交をおこなう中国

国内問題を多く抱え、いつコラプションをおこし、分裂・混乱するかわからない中国

国際標準では考えられないことをしたり、普遍的なルール・規範を守らない中国

エネルギー問題などで露骨に利権獲得をおこなう外交をする中国

イデオロギーにとらわれることと、現実主義なことがあり、わかりにくい外交をする中国

上意下達的な外交をおこなうが、一面地方が独自の外交をする中国

一部の国際的に非難されている国家と積極的な関係を築いている中国

瀋陽総領事館事件、サッカー事件、大使館などに対する投石事件などの一連の「反日運動」の存在、また「反日教育」によって、外交を国内化している中国

### ■しかし、…

中国は国際政治においても存在感を増し、サミットなどにも加わらんとしている

世界のリーダーのひとつとしての位置、国際連合の安全保障理事会の常任理事国

アメリカはエンゲージやコンテインメントなどを繰り返しながら、どちらかに傾くわけではなく、いまは stake holder という概念で位置づけている

中国経済の重要性が高まり、中国を敵にまわすような外交をすることは避けられている  
六カ国協議に見られるように国際問題解決のイニシアティブが見られる  
周辺諸国との間で領土問題などを解決している  
人権問題、また軍事情報の非透明性、知的財産の問題などは大きな問題だが、それは国際  
的な要請にとどまっている  
「日本以外は」うまくいっている、という評価も有る

#### ■中国外交をめぐるキーワード

こういったイメージについて、それをどう考えればいいのか、この講座を通じて、みなさんと一  
緒に考えていくことができれば…

さしあたり、以下のキーワードはおさえてはどうか。

1. 「中国」の維持、発展のための全方位外交
2. 責任ある大国、グローバリゼーションへの適応
3. 多極化社会、独自路線、国連重視外交(アメリカとの協調を前提としつつ、一極化は防ぐ)
4. 和平台頭、和諧社会(脅威論を否定する議論、ソフトパワー重視)
5. 周辺重視／協調外交(国内における経済発展重視、周辺に混乱を生じさせない)
6. 紛争処理の考え方としての「双赢 WIN WIN」
7. 国益重視外交(安全保障重視、エネルギー外交重視)
8. 在外居留民重視外交、海外華人(華僑のみならず、労働者も)
9. 旧社会主義国、根強い「友好外交」
10. 第三世界(先進国と看做されることへの躊躇)

[補足説明]

- stake holder
- エンゲージメントと抑制の振り子の問題
- 内政面での不安定性の外交への露出
- 2050年を目処に進められる中華民族の復興

## 《歴史的に中国を見る－中国外交史研究の前線－》

### 0. 外交史の重要性

[中華民国憲法前文]

中国是世界上历史最悠久的国家之一。中国各族人民共同创造了光辉灿烂的文化，具有光荣的革命传统。一八四〇年以后，封建的中国逐渐变成半殖民地、半封建的国家。中国人民为国家独立、民族解放和民主自由进行了前仆后继的英勇奋斗。二十世纪，中国发生了翻天覆地的伟大历史变革。一九一一年孙中山先生领导的辛亥革命，废除了封建帝制，创立了中华民国。但是，中国人民反对帝国主义和封建主义的历史任务还没有完成。一九四九年，以毛泽东主席为领袖的中国共产党领导中国各族人民，在经历了长期的艰难曲折的武装斗争和其他形式的斗争以后，终于推翻了帝国主义、封建主义和官僚资本主义的统治，取得了新民主主义革命的伟大

勝利，建立了中华人民共和国。从此，中国人民掌握了国家的权力，成为国家的主人。

重要性＝帝国主義との関係

侵略された歴史＝半植民地になっていった歴史

抵抗した歴史＝反帝国主義闘争、辛亥革命などにおける不完全性

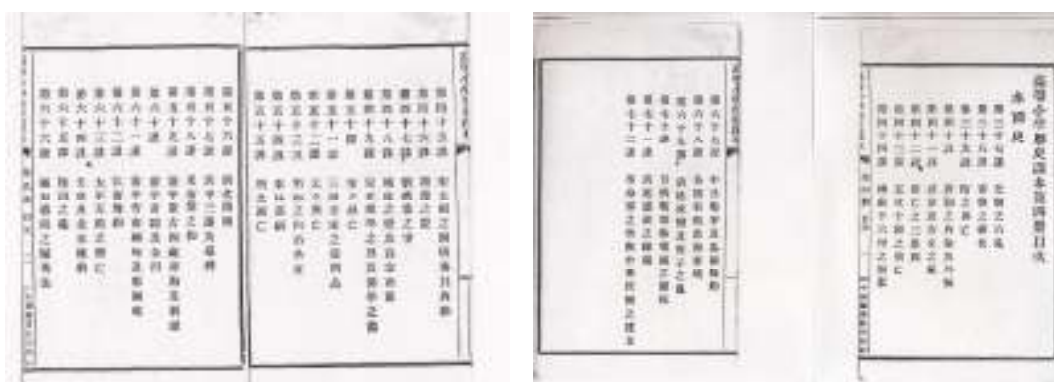
打倒した歴史＝共産党による成果の強調

中国外交史＝「侵略・抵抗」の歴史

その中で日本は特に中国を「侵略」し、中国人民が特に「抵抗し」、特に「打倒した」存在

## 1. 中国自身による「外交史」の形成の歴史

しかし、このような外交史観はいつ形成されたのか。



〔民国初期の教科書の目次〕

★実は清末民初(清朝末から中華民国成立初期、1890年代—1910年代)に既に、侵略＋清朝滅亡という観点での歴史形成。＝ちょうど、中国における「中国意識」の出現

★この時期に、王朝ではなく、「中国」を単位とした歴史認識が形成される。「中国(三)四千年」

★『清季外交史料』『清史稿』(属国志、邦交志)など、後の基本史料が形成

(周辺諸国が「属国」として認知される)

★日本は、まさにこの時期に主要な敵国として登場(それまでは列強と共同で中国に関与)

こののち、国民党、共産党がそれぞれ脚色を加えていく。(袁世凱へのマイナス評価、清朝への過度のマイナス評価)

→ 同時に日本などでは、「中国」そのものを単位とする歴史を疑問視する歴史観が形成。  
また遅れたもの、非文明的な国として中国を強調(日本の文明性、先進性強調のため)  
中国がもともともっていた世界観や国際秩序と、それが崩壊していく過程に関する研究  
[参考]日中教科書問題の発生は1910年代。日中間の歴史認識は大きくズれる。

国際連盟でも歴史認識問題が議論される。

★日中戦争中は、互いに「大日本」「大中華」を想定する。[地図参照](#)

## 2. 外交史理解の転機—神話の組み換え— [【映画鑑賞】「我的1919」](#)

中国における「外交」、国際関係の重視

世界の中での中国の位置づけの変容

侵略に対する抵抗、打倒帝国主義だけでは、正当化の論理に限界が生じる。

- ナショナリズム、中国における国際的地位、中国外交の近代化、国権回収運動…
- 中国の周辺外交、全方位外交
- 国際組織における中国

### 3. 最近の潮流と明らかになってきた事実

(1) 中国は RATIONALIZING してきたのか

不平等条約改正史、普通の国？(大国化)

(普通の近代国家？、朝鮮などでの租界、ヴェトナムでの領事裁判権要求)

(2) 国際社会でどのような役割を占めてきたのか、国際規範にいかに対応したのか

国際規範の受容、国際的地位向上、ハーグ平和会議、国際連盟、多元的な国際関係

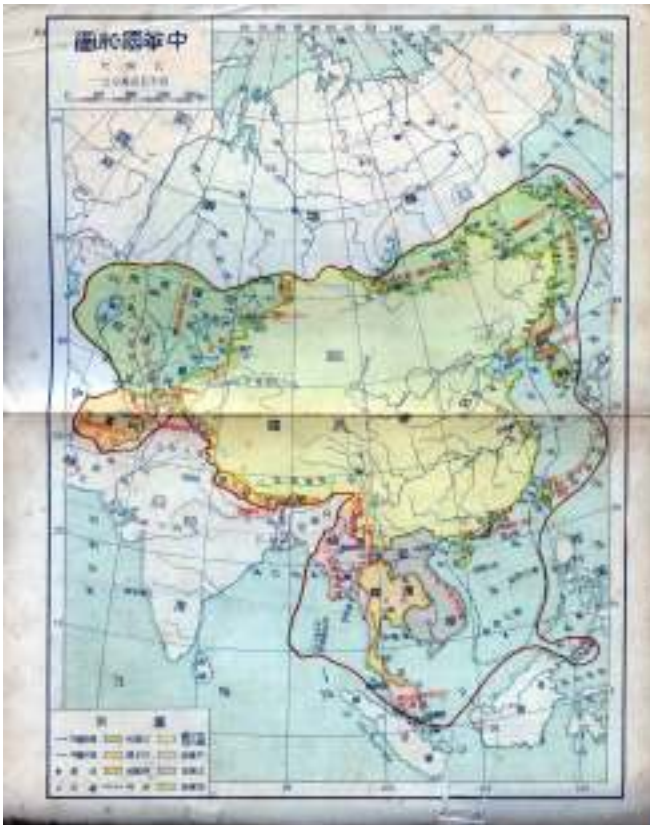
(3) 周辺諸国と協調してきたのか

アジア諸国との連携

★日本で特に強調されてきた、中国の非文明性、非近代性、伝統性。

### 4. 大国化と中華思想の問題、1939年の中華国内政部が作成した中華国恥図

中国が大国化することは(そもそも大国だが)、否定できないし、それと向き合わねばならない。



そのことを考えるとき、中国の非文明性、非協調性などとともに、日本で強調されるのが、中華思想、あるいは冊封や朝貢貿易のこと。この点について、最近はどのような議論があるのか。

- (1) 冊封・朝貢は確かにあったが、時代ごとに変容する多様なもの。
- (2) 朝鮮、日本、ヴェトナムなどにも共有されたシステム。だが、朝貢する側の論理は別なもの。
- (3) 冊封や朝貢のすべてが関係を律するわけではなく、「互市」などの通商関係は別個に存在。
- (4) イギリスが当初挑戦したのは「互市」。冊封は維持される。
- (5) 清末に対朝鮮関係は変容
- (6) 記憶としての形成もまた別なもの

おわりに

- (1) 日本から中国への目線の相対化  
歴史的な中国観の形成、地理的な問題
- (2) 中国はそもそも、むかしから…／多元的な中国像、中国像の変容
- (3) 中国外交を、全体像から、中国に即して(一旦は)把握する
- (4) その上で、どう考えるか

.....  
[中国外交史に迫る参考文献]

●ウェブサイト

- 中華人民共和国外交部ウェブサイト <http://www.fmprc.gov.cn/chn/default.htm>  
アジア歴史資料センターウェブサイト [http://www.jacar.go.jp/search/search\\_frame.html](http://www.jacar.go.jp/search/search_frame.html)  
近代中国外交ウェブサイト[台湾] <http://archwebs.mh.sinica.edu.tw/foreign/>  
北海道大学川島真研究室 <http://www.juris.hokudai.ac.jp/~shin/>

●書籍(日本語)

- 坂野正高『近代中国政治外交史』(東京大学出版会、1973年)  
濱下武志『近代中国の国際的契機—朝貢貿易システムと近代アジア』  
(東京大学出版会、1990年)  
岡本隆司『近代中国と海関』(名古屋大学出版会、1999年)  
岡本隆司『属国と自主のあいだ』(名古屋大学出版会、2004年)  
茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』(世界史リブレット 41)(山川出版社、1997年)  
川島真『中国近代外交の形成』(名古屋大学出版会、2004年)